

生活体験活動における自己決定の援助  
長期不登校生徒との町家合宿グループの試み

立命館大学応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
山下 桂永子

現在、様々な不登校児童・生徒の居場所作りが行われている。本研究では、どのような援助が不登校生徒を居場所から社会へとつなげることになるのか、自己決定に焦点をあて、宿泊を伴う生活体験活動（以下、合宿グループ）を行い、記録とインタビューの検討を行った。

その結果、安心感が個の自己決定のプロセスに影響を与え、グループの親密性の高まりと自己認識の深まりが、自己決定的な行動を促進し、将来の自己イメージに触れることが、現在の自己決定に影響を与えることが示唆された。また、ボランティアと参加者の間で行われた相互の関わり行動による関係作りが、参加者同士の関係作りに引き継がれていった。

母親のインタビューからは不登校生徒は新しい体験や他者と関わる機会が少なく、そのことに母親が不安を感じていること、合宿グループをきっかけに母親と参加者の間でコミュニケーション行動が生まれたこと、母親にとって、子どもの成長を感じるきっかけになったことなどが語られた。

以上のような結果から、1. 自己決定について、1) 見守る人の存在と、一緒にするという他者の行動が個の自己決定のプロセスに影響を与えうるということ、一緒にするだけではなく、一緒にしなくてもよいという選択肢を与えられた上での「自分で決める」という体験活動が、自己決定的な行動を引き出すのではないかとということ、2) 将来の自己イメージに触れることが、現在の自己決定的な行動に影響するのではないかとということ、3) 自己認識の変化が他者とのコミュニケーションを引き出すこと、4) 他者との関わりが自己認識を深め自己決定を促すという一連の動きが社会へとつながっていくこと、5) ボランティアが媒介を行うことで不登校生徒の他者との関係作りに援助的な役割を果たすことができるのではないかとということ、を考察した。

2. 生活体験活動について、1) 個の持つ「集団へのなじみにくさ」と状態である「不登校」が合わさることで、生活体験が奪われ、社会とのつながりにくさを産むのではないかと、2) 体験活動が母親の子どもへの認識の変化をうながすきっかけになりうること、3) 体験活動が親子のコミュニケーションを引き出す可能性があること、4) 地域社会が生活体験活動にとっての大きな資源となりうるということが考察された。

守られた枠の中で自己決定に寄り添うことが自己決定への援助であり、体験活動は自己決定を援助し、人とつながっていく機能を持つべきである。つながりを求め始めた不登校生徒への援助には、守られた居場所で個々の課題に取り組む回復的援助の視点から、守られた社会での他者との関わりに取り組む発達援助的な視点への移行が求められるのではないだろうか。また、自己決定の援助と社会へとつなぐ体験活動は不登校以外の大多数の子どもたちにも開かれていくべきであり、このような体験活動は更なる実践と研究の積み重ねが必要であると思われる。